
僕が死ねば、彼女が助かります。

白鳥準

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が死ねば、彼女が助かります。

【コード】

N1972L

【作者名】

白鳥準

【あらすじ】

僕が死ねば、彼女が助かります。

こんな噂がある。

とある殺し屋がいる。刃物と薬物を使う、凶悪な殺し屋が。そいつに殺されるか、死ぬまで生き続けるかが僕らの人生だ。後者が僕らにとつての願いだが、恐らくそれは叶わぬ願い。ただ、少なくとも僕はそれでも良いと思っっている。何故なら、僕に生きていく意味など無かつたからだ。

殺し屋の到来時期は、風の噂によつて運ばれてくる。誰かが殺し屋を噂すれば、近いうちにそいつがやってくる。どういう形でやってくるのかは知らない。誰も知らない。知っている奴は皆、殺し屋に殺されてしまうからだ。先日も、隣に住んでいた友人の一人が殺し屋によつてこの世を去つた。悲しいという感情こそ無かつたが、彼がいたスペースに大きな空気が出来てしまったことで、そこを虚しい風が通り抜ける事が多くなった。ただ、世の中は上手く出来ているもので、彼がいなくなったスペースには新しい住民がすぐに入ってきた。新しい奴は、たいてい僕ら穢れた存在とは違う、生まれたての赤子のように綺麗な奴だった。いや、実際彼らは生まれたてなのかもしれなかつた。

「おい、聞いたかよ。また殺し屋を見た奴がいるらしいぜ」

「マジかよ。今度は誰が殺されちまうんだろうな」

通りすがりが偶然、僕の傍でそんなことを言った。

そう、殺し屋の噂をしていた。

今まで運よく当たらなかつたルーレットが当たってしまったようだ。いや、僕もここに住み込んで大分長い。初めは小さかつた当たり判定も、知らない間に大きくなつていたのかもしれない。どちらにせよ、時が来る事がある種予感していた僕にとつて、この事実は驚く事でも無かつた。

部屋はかなり大きくなつていた。長年付き合つてきたこの部屋と

もお別れらしい。殺し屋は、殺害対象の部屋も破壊してしまうらしい。殺し屋というよりは、もつと深い意味での掃除屋かもしれない。そうだな、ここまで部屋を大きくしてしまったのが間違いだらう。そりゃ、殺し屋の目にも留まる。僕がこんな大きな部屋を建ててしまつては、新規加入者がやってこれない。僕は、今こうして生きているだけで、次にやってくる人に迷惑をかけているんだ。笑つてしまつた話だつた。

覚悟は決まつた。殺し屋に黙つて殺されよう。それが良い。僕は老害だ。どうしようもなく生きている意味の無い奴なんだ。それだつたら、ここで潔く死んでしまつた方が、皆のためにもなるだらう。僕はそのまま、部屋で三日の時を過ごした。今か今かと待ちわびながら、その反面緊張で汗は止まらないし、無性に暴れたしくもなつた。身体ががくがくと震え、深呼吸をするので精神が精一杯だつた。

いつだ、いつやつてくるんだ。

そう願っていたら、ついに殺し屋はやってきた。

僕の部屋の天井を巨大な刃物で切り裂き、音も無く着地した。天井が壊されたせいで、長らく見ていなかった光が部屋中に溢れた。とてつもない光源で視界を遮られた僕から、殺し屋の姿は見えない。これが殺し屋の姿を知っている奴がない理由だらうか。巧妙過ぎる手口だ。僕らは普段光に慣れていないから、突然の光には急に対応出来ないのだ。せめて殺される前に殺し屋を拜んでおこうと思つたのに、これでは本当にただ殺されるだけである。

「ま、待つてくれ」

僕は光の中にそう呼びかけた。殺し屋もこの強烈な光のせいで僕の姿を捉えきれないのか、中々手を出してこなかった。だが、時折聞こえるガリガリ、という音は、恐らく僕の部屋を切り崩している音だらう。一手一手、着実に僕を追い詰めようとしている。

「き、君は何故僕らを殺すんだ。僕らが何かをしたというのか！」
返答は無い。ただ、その代わりに、頭の中で反響するような、声

とも音とも言えぬ不思議な『何か』が聞こえてきた。

『お前が死ねば、彼女が助かる』

それは、ある種天啓にも似た感覚だった。そう、神の御告げ。声の主が男なのか女なのかは判断がつかなかったが、だからこそ尚のこと、それが神の声に聞こえてならなかった。つまり、神が僕に死ねと言っているのだ。

「彼女とは誰なんだ！ 僕が死んで、誰が助かるというんだ！」

『お前の知る由ではない。お前が死ねば、彼女が助かる』

「僕は見ず知らずの奴のために死ななければならぬのか？」

『お前が死ねば、彼女が助かるのだから』

まるで洗脳するかのようになり、その言葉を繰り返す。僕はあまりの恐怖に、先ほどまで覚悟していた死を拒否しようとしていた。だって理不尽だ。せめてその『彼女』が誰かなのかさえ教えてくれれば決意も濁らずに済んだかもしれないというのに、脅迫のような言葉の羅列に逃げ出したくもなる。

僕は部屋の扉のほうまで、もつれる身体に鞭打ちながら逃げ回った。だが、ついにそれを追うようにして足音が近づいてきた。

「何故だ！ 僕は生きていただけなのに！」

『お前が死ねば、彼女が助かるのだ！』

もはやそれは凶器ではない。あまりに巨大過ぎる刃物が振り下ろされる姿は、既に事故の領域だ。僕に回避する術は一切無く、救済の道はどこにも残されていなかった。ただただ、圧倒的な「死」を目の前にして、その理不尽さを呪うだけだった。

結局、僕は殺された。分からない事だらけだった。殺し屋の正体も、殺し屋の目的も、『彼女』という存在も。

刃物は僕を無常に貫き、僕は無意識の中数回の痙攣を繰り返した。殺し屋は串刺しになった僕を連れて、切り裂いた天井へと昇り、帰っていった。

分かる事は僕が死んだ事。

そして、僕が死ねば、彼女が助かるということだけだった。

自動扉が開く。赤いランプが消え、長椅子に座っていた家族が皆、長い緊張から解放された。扉の中からは白衣を着た医師が出てきた。何かをやりきったような顔に、激しい疲労の色を浮かべていた。

「手術は成功しました。娘さんの悪性腫瘍は無事取り除かれました」
その言葉に、家族は涙ながらに安堵した。弟は初めての家族の危機が救われた事に、小さいながらも涙し、母と父は素直に娘の生命が繋がった事を喜んだ。医師もそんな家族の姿を見て、自身が行った手術が意味のあるものだったと、身体中を襲う疲労に達成感と幸福を感じた。

そうして、殺し屋は小さく微笑んだのだった。

(後書き)

どうも白鳥です。

SSは苦手です。最近そう思いました。2500字で名作を書ける作者様には本当に敬意を表したい。僕には無理です。

この物語はとどのつまり「悪性腫瘍」を擬人化したようなものです。悪性腫瘍がどういうものなのかも知らずに書きましたが、つまりはそんな感じですよ。

悪には悪なりの正義がある。いえ、そんな話じゃありませんがね。

5分企画の作品はタグ検索で出てくると思っているので、よければほかの作品もお楽しみ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1972/>

僕が死ねば、彼女が助かります。

2010年10月8日14時37分発行